《野中の一本杉とおかね塚》

六郷町公民館の東、野中といわれる方に大きな一本杉がある。一本杉というと樹高の高い一本の大杉を思ってしまうが、この一本杉は真直天を指してのびた、ひょろ長い一本杉ではない。われわれはこれを野中の一本杉、あるいはまた野中のバッキャ杉ともよんでいる。樹高が高いというのではなく、下方の枝が横にはって、むしろずんぐりと、遠くから見れば春の野の蕗の薹に形が似ているところからいわれたものであろう。ある人はまたこれはお化けのバケ杉という意味からきたものであろうというが、のちにいうようにこの杉を霊木とし、神木として伝えてもいるので、バケ杉の意味も考えられないではない。多く耳にするのは、バッキャ杉と発音される方である。

勿論一見して数百年はすぎた古木、老大木である。

現在はこの一本杉を中心にして、二五〇〇平方メートルの広さに耕地が整理され、残されて小公園ができている。称して六郷町の一本杉児童公園といっている。

公園が造成されるにあたって、この一本杉は小西家の所有から町に移管されたが、小西家に伝わる「野中の一本杉」、または「おかね塚」伝説にでてくる杉がこれである。

昔はこの一本杉のあるあたりは、その地名の示すように原野であったろうから、これだけ大きな杉が一本だけここにあるのでは、人目をひくに充分である。しかもその杉のかたちが、雄大で異様であれば尚更のことである。

公園になった現在でも、公園の周囲は開墾された田地が広々として、住宅もはなれているから、まことによくその偉容が目に入る。

東の山を背景にした緑濃きこのバッキャ杉を遠くから見る眺めはすばらしい。

ひょろひょろと背の高い一本杉でないといったが樹高はせいぜい一〇メートル位のものであろう。

さわしくずっくりと太く周囲五メートルは充分あるであろうと思われる。

問題は樹齢であるが、一見して誰にも数百年は経たであろうことは察せられるが、正確な調査の数字は残念ながらいずれについてももっていない。

しかしこの杉が何百年もの年輪を重ねているうちに、いつの頃からか、この一本杉について伝説が生まれた。そしてその伝説には女主人公がおり、おかねというのだが、そのおかねについてはまたおかね塚と称される墓所もあって、この伝説は重なりあってくる。

伝説という言葉は少し固苦しいが、われわれには、ことのイワレとか、イイツタエといった方が馴染みがある。この家にはこのようなイイツタエがあるという。木、石、塚、家といった固定したものについて伝説が多い。それが書かれたものではなく、口から語りつがれて代々伝わってきた。

語りつがれるものだけに、それが忘れさられないように、うすれ消えてしまう前に早くから記録採集されるようになった。しかしそれがイイツタエといわれるように、語る人がいて語られるのだが、同一人の場合でも、それを語る時と場所の異なる場合で、短くもなり長くもなり、内容でも幾分のちがいが生ずるのはいたし方がない。あるひとつにはでてくることも、他のひとつにはでてこないということがありうる。またこの話にはこれだけは欠けてならないというもの、共通したあるべきはずの事柄といったものがあるかもしれないが、これをいにしてもそれを信じ語りつたえてきた。

あるひとつの伝説の中には信ずべき部分がどこかにあるのか。それともすべて虚構であるが昔の人たちは、それを信じ、あるいは信じなくとも、おもしろい話としてだけで、いいつたえられてきたものであろうか。これはまたむずかしい別の問題で、今これを考える余裕はない。

しかし、一応そのようなことを頭におきながら、これを昔、古老からききき、今古老となって話してくれる人もいるにちがいないが、いまはこれまでにかきとめられている「野中の一本杉」「おかね塚」についてのいいつたえ、あるいはこれをいいかえたようであるが、小西家では三月の桃の節句に餅をつかないのは何故かということのいいつたえについて、二、三日のふれたものを再録させていただこうというのである。



ばっきゃ杉（野中の一本杉）

前にいったようにこの話にはどこか少しずつちがいがあって、どれが正しくどれがまちがいであるなどはいうことはできないし、元のかたちがこれだと勿論いまではいうことができなくなっている。語る人によって、きく人かくによって、殺されたおかねは主家に忠実のあまり男たちにつめたい女性になり、二人の男に恋されてその男をしっとに狂わせる女性にもなるが、そのようなところは話のはずみで変わる部分であろう。ともかくおかねについての伝説であり、野中の一本杉についての伝説である。

昭和四四年九月一〇日の秋田魁新報は、ふるさとの年輪名木　巨木シリーズの21に野中の一本杉の写真を大きくのせてとりあげている。